

●日本の刀剣 | 天下三作

名匠・藤四郎吉光の特長が出た名作短刀

平野藤四郎

❖ ひらのとうしろう
●宮内庁蔵

前田利長^{〔所用〕}



短刀 銘 吉光
鎌倉時代
刃長 30.0cm 内反り



前田利長肖像
魚津歴史民俗博物館蔵

前田利長（1562年～1614年）
安土桃山時代～江戸時代初期の武将、大名。
加賀藩初代藩主。父・利家と共に織田信長、
後に豊臣秀吉・秀頼に仕える。五大老のひと
りとして徳川家康に対抗した利家の死後、難
しい政治判断の末に家康と結ぶ。その後、内
政に苦慮しながらも俗にいう「加賀百万石」
の礎を築き太守となった。

栗尻茎には、「吉光」の二文字銘が切られ
ている。区送り（まちおくり＝茎と刃の境
界部分を磨って刃長を短くすること）を施
したことが、見て取れる刀身だ。

高純度の地金で作られ
輝きの美しさは圧倒的

織田、豊臣、徳川を渡り歩いた異形の名刀

鯨尾藤四郎

❖ なまずおとうしろう
●徳川美術館蔵
©徳川美術館イメージアーカイブ/DNPParicom

豊臣秀頼^{〔所用〕}

刃長は、初め1尺2寸9分（約39.1センチ）、越前康継に
よって焼き直した後は1尺2寸7分（約38.5センチ）。刃
文は直刃調に小乱れ、小足混じる。



豊臣秀頼像 養源院蔵

豊臣秀頼（1593年～1615年）
安土桃山～江戸時代初期の大
名。太閤・秀吉の三男。正室は
二代将軍・徳川秀忠の娘・千姫。
そのカリスマ性を、家康は恐れ
たとも伝えられる。大坂夏の陣
で滅亡した豊臣家だが、秀頼に
ついては大阪城を脱出し生き延
びたとの説もある。

脇指 銘 吉光（名物鯨尾藤四郎）
鎌倉時代
刃長 38.5cm

大名がこぞって求めた吉光短刀の神話

厚藤四郎

❖ あつとうしろう
●東京国立博物館蔵
画像提供：Image: TNM Image Archives

毛利輝元^{〔所用〕}

号の由来となった、重ねが非常に厚い「鎧通し」と呼ばれる造
り。組討ちで、敵を鎧の隙間から刺す用途の短刀。根本部分の
厚みが四分（約1.2cm）あり、実戦的な凄みあり。



絹本着色毛利輝元像
毛利博物館所蔵

毛利輝元（1553年～1625年）
戦国時代～江戸時代前期の大名。関
ヶ原合戦の西軍総大将。厚藤四郎を所
持していた秀元は、輝元の従兄弟であ
り一時期養嗣子であった。輝元もまた
「一期一振吉光」や「毛利藤四郎」など、
藤四郎吉光の名刀を所持していた。



短刀 銘 吉光（名物 厚藤四郎）
鎌倉時代
刃長 21.8cm 反りなし

ここでは、藤四郎の作風がよく表
れた三振りの短刀を紹介した。
まず、平野藤四郎。その刀号は、
秀吉の家臣・木村重茲^{しげかつ}が摂津の商
人・平野道雪より入手し、秀吉に献
上したことに由来する。形状は大振
り。藤四郎の作刀の中でも屈指の出
来と評されている。秀吉が前田利長
に譲り、加賀藩主・前田家の家宝と
なったが、第12代藩主・斉泰から明
治天皇に献上され、現在は宮内庁で
保管されている。次に、厚藤四郎。
短刀の中でも刀身が特に短く、厚み
がある形状が特徴的。元々は足利将
軍家で代々受け継がれ、以降は堺の
商人や刀剣鑑定家・本阿弥光徳、さ
らに毛利秀元ら様々な有力武将の手
を渡った。現在は国宝として東京国
立博物館で保管されている。最後に、
鯨尾藤四郎。元々は薙刀として作ら
れたものが直され、脇差しとされた。
刀号の由来は、形状が「鯨（なまず）
の尾」に見えることである。

記録が残っている範囲で最古の所
有者は、織田信長の次男・信雄。そ
の後、信雄が秀吉に臣従した際、鯨
尾藤四郎も秀吉の手に渡り、さらに
秀吉の三男・秀頼に引き継がれた。
秀頼はこれを脇差しとして好んで使っ
たという。

型にとられず
気品のある刀を作り続けた
鎌倉時代、刀鍛冶の本場だった京
都の栗田口からは多くの名工が生ま
れた。栗田口一門の太刀や刀は、純
度が高い地金で作られており、輝き
の美しさは圧倒的であった。その中
でも栗田口吉光は、相州の正宗、越
中の江義弘と共に「天下三作」と讃
えられる歴史的な名工である。通
称は「藤四郎」。生没年は不明だが、
鎌倉時代中期の人物だとされる。
藤四郎の作品の大半は短刀で、生
涯で作った太刀は、傑作との誉れ高
い「一期一振」のみである。その歴
代の所有者は諸説あるが、幕末に尾
張藩主の徳川茂徳より孝明天皇に献
上されて以降、歴代天皇に相続され
ている。藤四郎は型にとられず、
独特の作刀をしたが、作品はどれも
気品があった。室町時代になり、歴
代の足利将軍を中心に平安時代や鎌
倉時代の美しいものを貴ぶ気風が広
がり、藤四郎の名声は高まった。こ
れ以降、藤四郎が作った刀を手にし
た武将は、一柳直末、黒田如水、豊
臣秀吉、毛利輝元、徳川家綱ら錚々
たる名前が並ぶ。

天下三作

際立つ沸の美しさ
茎は錆びても趣深い

●日本の刀剣 天下三作

三成が家康の二男に贈った愛刀

石田正宗

❖ いしだまさむね

●東京国立博物館蔵

画像提供：Image: TNM Image Archives

石田三成

〔所用〕

正宗による天下無双の一振り

中務正宗

❖ なかつかさまつむね

●文化庁蔵

本多忠勝

〔所用〕

石田三成（1560年～1600年）

安土桃山時代の武将、大名。豊臣秀吉の側近として政権を支える。主に官吏的役割にあって活躍し、武断派武将の反感を買うこととなった。後に関ヶ原合戦で西軍を組織するも徳川家康率いる東軍に破れ、京都六条河原で処刑される。



石田三成像

沸の美を強調した相州伝の典型的な作風を示すが、正宗の作としては互の目が目立ち刃縁が締まりこころである点が特色とされる。

本多忠勝（1548年～1610年）

戦国時代から江戸前期にかけての武将。徳川四天王の一人。14歳の時に初陣で敵の首級を挙げ、以降武勲を挙げ続けた。晩年は眼病を患い隠居したが、「侍は首取らずとも手柄なりとも、事の難に臨みて退かず。主君と枕を並べて討死を遂げ、忠節を守るを指して侍という」と言い残し、この世を去った。



本多忠勝像 良玄寺蔵

沸出来の互の目乱に変化し、履きの溢れる作風がその持ち味。相州伝の上工と比べても一段優れた出来映え。

茎が大きく磨上げられた無銘の刀だが、鎌倉時代末期の名工・相州正宗の作とされている。二か所の切込疵は、かつて合戦場で実際に使われたことを物語っている。



刀 無銘 正宗（名物石田正宗）

鎌倉時代

刃長 68.7cm 反り 2.5cm

「本多中務所持」と銘打たれた茎。これほどまでの名刀を送られた家康は、感無量であつたに違いない。



刀 金象嵌 銘 本多中務所持 正宗本阿（花押）

鎌倉時代

刃長 66.9cm 反り 1.7cm

銀砂をまいたように輝いて見えるもののこと。沸が多い作風を「沸出来」という。硬軟の鋼を組み合わせて鍛錬された正宗の刀剣は、沸の美しさが際立っていた。一方、茎（刀身の柄に使われる部分）は、正宗の刀剣も一見ありふれた舟形だった。だが、作刀の際によく鍛えられているため、錆びても趣深かった。

ここでは、代表作2作を紹介する。まず、石田正宗。元は石田三成の愛刀だったが、三成がこれを贈った相手は徳川家康の次男、結城秀康だった。三成は秀吉の死後、権力争いをした他の秀吉の家臣たちに襲撃され、家康と秀康に救われた。この時、秀康に感謝を伝えるため、愛刀を贈ったのだ。その後、三成は関ヶ原の戦いで家康に敗れ、処刑された。一方、石田正宗は秀康の死後、津山松平家で受け継がれた。次に、中務正宗。伊勢桑名藩初代藩主・本多忠勝の愛刀だったため、その官名「中務大輔」が刀号の由来となった。「本多中務所持」という茎の文字は、忠勝が本作を刀剣鑑定家・本阿弥光徳の取次で購入した際、金象嵌で入れさせた。のちに徳川家康に献上され、徳川家の伝来品に。沸の妙味が出色の逸品は戦後、国宝に指定された。

—— 実戦を強く意識しつつ
美にもこだわり抜いた作刀

戦国時代まで刀作りの盛んな地域は、一部に限られた。主に山城国、大和国、備前国、相模国、美濃国の5地方で、各地方に伝わる独自の製法や作風はそれぞれ「山城伝」「大和伝」「備前伝」「相州伝」「美濃伝」と呼ばれる。このうち、相模国で相州伝を確立したのが天下三作の1人、正宗である。正宗は鎌倉時代末期から南北朝時代を生きたとされる。経歴は不明な点も多いが、知名度は天下三作の中でも一番だ。作刀は一子相伝が当然だった時代、多くの弟子を育て、後世の刀作りに多大な影響を与えたためである。当時は2度の元寇、南北朝の内乱があり、作刀も実戦が強く意識されていた。正宗の太刀は、長寸だったのを斬り縮めたものがほとんどだったが、それも実戦で使いやすかったためだ。この時代、太刀は最初から所有者の体格に合わせて作られることも多かった。もともと、正宗の刀剣は見た目もこだわり抜かれていた。中でも大きな特徴は、沸であった。沸とは、焼き入れて刀身に生じる模様のうち、

●刀剣の画像は、すべて縮小率が違います。刀剣そのものを大きく掲載するためにそのような処理となっています。

●日本の刀剣 天下三作

鬼日向、がどさくさに分捕った短刀の傑作

日向正宗

◆ ひゅうがまさむね
●三井記念美術館蔵

水野勝成

〔所用〕



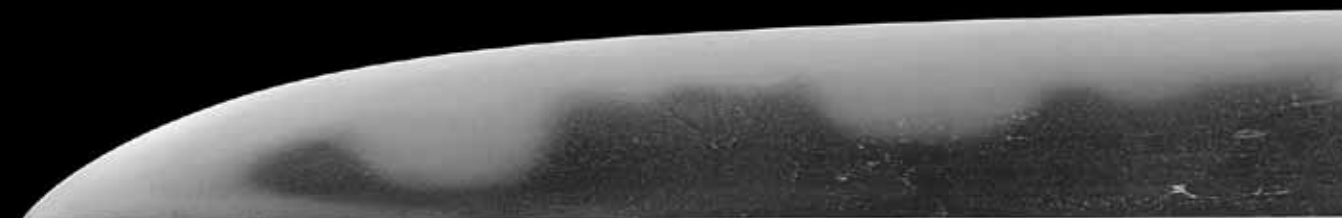
短刀 無銘 相州正宗（名物日向正宗）

鎌倉時代

刃長 24.9cm 反り=なし



黒田長政騎馬像
福岡市博物館蔵



名品が多い相州正宗の作の中でも、鍛え強く覇気に満ちた日向正宗は白眉の出来といえよう。ちなみに裏面の護摩箸は、後に本阿弥光徳が彫らせたものと伝えられる。

実戦で使用された刃こぼれが感慨深い傑作

池田正宗

◆ いけだまさむね
●徳川美術館蔵
©徳川美術館イメージアーカイブ/DNPart.com

伊達政宗

〔所用〕

伊達政宗（1567年～1636年）

出羽国と陸奥国の戦国大名で、伊達市の17代当主。幼少期に病を患い、片目を失ったことから独眼竜の異名で知られる。織田信長や豊臣秀吉にも一目置かれた武将で、戦に長けた一方、外交面でも手腕を発揮し、政治力も高かった。



伊達政宗像 土佐光貞筆
東福寺霊源院蔵



のちにこの刀は徳川將軍家の手に渡り、代々受け継がれ、現在は徳川美術館に所蔵されている。



刀 象嵌銘 正宗磨上 本阿弥（花押）（名物 池田正宗）

鎌倉時代

刃長 67.0cm 反り 1.8cm

刀身は、身幅広く切先延び、雄大な造込みである。金象嵌にて「正宗磨上」「本阿弥花押」との銘が刻まれている変化に富んだ刃文が美をたたえている。

誤解が生まれたというのが真相であろう。講談や芝居などでも正宗が題材にされた例は多い。ただ、その人物像は謎めいているためか、様々な脚色が施されてきた。創作された逸話の数々が正宗の名声を高めた面もあったろう。

正宗の刀剣は無銘作であっても、極めて高い価値が認められている。たとえば、ここで紹介した「日向正宗」は国宝に指定されている。元々は豊臣秀吉から石田三成に下賜され、さらに三成から娘婿の福原長堯に与えられたとされる。そして関ヶ原の戦いの際、水野勝成が我が物としたことから、勝成の官名「日向守」に基づく「日向正宗」という刀号が定着した。その後は紀州徳川家の家宝となったが、昭和初頭に三井財閥が買い取り、現在三井記念美術館で所蔵されている。一方、「池田正宗」は重要文化財に指定されている。あの「独眼竜」伊達政宗が千貫で購入したが、九州の武将・有馬晴信に売却。それからさらに鳥取の武将・池田長吉に売り渡された。長吉は刀剣鑑定家・本阿弥光徳に命じ、茎に「正宗磨上」「本阿弥花押」との金象嵌を入れさせた。そのため、「池田正宗」が本作の刀号となった。

人物像が謎めいているため数々の逸話も創作された

正宗が活躍した時代、相州の刀工は刀剣に銘を打たないことが多かった。正宗の作品も大半が無銘刀であった。そのため、明治の頃には、正宗という刀工が実在したこと自体を疑問視する「正宗抹殺論」が浮上した。これを唱えた刀剣鑑定家の今村長賀は、自説の根拠として、「正宗は豊臣秀吉に珍重されて有名になったが、それ以前の文献では名工とされていない」などと指摘。正宗の正体については、「豊臣秀吉が政略的意図からでっち上げたのだ」と主張した。もっとも、正宗の刀剣には在銘の作品も少数ながら存在する。短刀では、重要文化財の「不動正宗」をはじめ、「京極正宗」「大黒正宗」などがそれにあたる。太刀では、重要美術品に認定された「木下正宗」が在銘作で、日本刀研究家の本間順治はその銘を「否定しがたい」と評している。

正宗の名前は南北朝時代から室町時代の文献にも散見され、これからも実在が裏づけられている。その作品に無銘刀が多かったため、あらぬ

天下

三

作

正宗に学んだ作刀が
相州伝の美しさを実現



刀 金象嵌銘 義弘 本阿（花押）

室町時代

刃長 69.4cm 反り 2.4cm

広直刃調に湾れを交え、深く沸がついてふ軽く、帽子は焼きが深く、一枚風に返る。江戸時代には、義弘の作を真似る刀工も多くあらわれた。

茎の部分には、「金象嵌銘 義弘 本阿（花押）」と金象嵌が。これによって金300枚の大出世をした無銘の刀である。

●日本の刀剣 天下三作

本阿弥光徳に見出された江義弘の逸品

桑名江

❖ くわなごう

●京都国立博物館蔵

本多忠政〔所用〕



本多忠政像

本多忠政（1575年～ 1631年）
伊勢桑名藩第2代藩主。後に播磨姫路藩初代藩主。忠勝系本多家宗家2代。正室は家康の孫の熊姫。父の隠居で桑名藩を継ぎ、そののちの大阪夏の陣では、292の敵首をとった。その功績で姫路城主となつて15万石を領した。

本作は後年、忠政の末裔である三河岡崎藩本多家に伝来し、代々受け継がれた。

—— 早世した越中の名工
作品は希少で入手困難

天下三作の中でも知名度が一番だった相州の正宗は、一子相伝の慣習にとられず、多くの弟子を育てたことはすでに述べた。正宗、藤四郎と共に天下三作と謳われる江義弘も元は正宗の弟子であり、「正宗十哲」と謳われる10人の高弟に名を連ねていた。江義弘は南北朝時代、越中を拠点に作刀をしたが、その名は室町時代以降の文献でなければ確認できない。これは、存命中に名声を得られず、死後に評価が高まったことを裏付けている。師である正宗の刀剣は大半が無銘だったが、江義弘の場合、正真作と認められる在銘刀は一振りも現存しない。早世したため、遺した作品も極めて少ない。それらが存命中に名声を得られなかった理由だとみられる。

江義弘の転機は、江戸幕府の第8代将軍・徳川吉宗の命で作成された『享保名物帳』だったとされる。作成者の刀剣鑑定家・本阿弥光忠が同書で正宗や藤四郎と同等の評価をしたため、江義弘の名は一気に高まった。ただ、織田信長が桶狭間の戦い

で今川義元を討った際、江義弘の作品「松倉江」を分捕ったという話もある。従って、江義弘はすでに戦国時代、相応の評価を得ていたとみる向きもある。

作品はすべて無銘刀で、しかも寡作だったため、「江とお化けは見たことが無い」とも言われる江義弘。換言すると、その作品は希少性が高いということだ。入手は当然困難で、それが作品の価値を高めている面もある。げんに、江義弘の作った刀剣は国宝や重要文化財に指定されたものが多い。

ここで紹介した「桑名江」もそのうちの1作だ。

その刀号は、伊勢桑名藩の第2代藩主・本田忠政が所持していたことに由来する。忠政は鷹狩の際、休憩のために立ち寄った農家の神棚に本作が家宝として飾られているのを見つけ、懇願して譲り受けたのだという。さらに忠政は、本作が刀剣鑑定家・本阿弥光徳に江義弘の作刀と認定されたため、「義弘本阿花押（光徳）」「本多美濃守所持」との金象嵌を入れさせ、山城国の刀工・埋忠明寿に磨り上げを行わせた。そしてその後、前出『享保名物帳』でも「桑名江」は所載された。